

古代中国における種族共同体の再編過程と政治地域

池田善昭

政治地域の歴史地理学的分析の理論的前提については既に略述した(1)が、古代とくに農耕経済確立前後の政治地域の構造は、地域集団とくに種族共同体の分解と再編の過程と不即不離の關係にあり、多くの疑点を孕みながらも、政治の地域への投影の諸様式を本源的に提示する。

政治地域の萌芽的形成は、人間集団の特定地域の占拠 (Occupance) と、占拠領域の区画 (Department) を形成するところからはじまる。この場合、本源的な地域集団としての種族共同体は、かれらの保持する文化類型の質と段階に即応して、固有の存在様式を有し、固有の文化圏・社会圏ないし生産圏を画定する。人間生態学における人間と土地系のクライマックス理論、そこから発展した「すみわけ」の理論、これは原初的段階における種族共同体の環境への対応としての限りにおいて適用されうるとしても、集団成員の社会構成体における地位——それは分業と流通を媒介としている——と、集団成員の形成する社会の存在様式、成員間に自律的ないし他律に作用する統合的機能の分析を前提としなければならない。これら諸要因は、共同体の地域への配置形態としての集落の立地様式を規定し、血縁集団の地縁集団への転化の過程において、種族共同体の解体ないし再編の様式を方向づける。古代国家においては、(一)定着居住民の形成とその人口の地域的集積(二)移動民と定着民との間の文化圏の包摂(三)異種族との接触による文化の伝播等を媒介として、(一)首都及び首都關係圏の形成、(二)首都と辺境との機能的結合がみられ、その様式の外延的

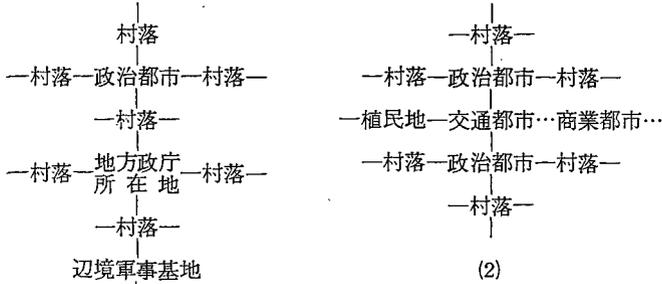
拡大（面積的拡大すなわち伝播、さらに交流に進む）と内包的發展（前者の横の關係に対して縦の關係をなし、社会階層の序列的形成を促す）の多様な絡み合いによって、地縁集團の土地占有の様式、さらに種族共同体の再編成様式が形成される。原始共同体社会から奴隸制社会への移行が即ちそれであり、この過程が古代的段階における政治的核心地域の形成、さらに核心の機能の外延的拡大としてあらわれる。その場合、核心の周辺諸地域においては、前段階の遺制は一般に微弱で、結合的機能の優位と生産諸力の發展に伴う經濟的機能の地域的移動が局地的諸条件の平準化を促進しうる限りにおいては、核心の立地を転じ集團の地域への投影方式を變貌させる。既に川喜田二郎により提示された農耕民・遊牧民・農牧民の政治地域における機能の試論⁽²⁾、江上政夫による文化類型の論⁽³⁾にみられる如く、これらの發展の諸様式を規定するものは、他ならぬ地域的諸条件の中で自己の生存を維持し再生産する社会集團そのものの存在様式である。

一、古代的段階における政治地域の構造論

生活圏の画定、これは採集・狩猟段階の分散的⁽¹⁾局地的立地から農耕・牧畜段階の定住集落の立地に進むにつれて決定づけられる。原始社会より古代奴隸制に發展する過程は、種族共同体の再編解體過程に照応し、生産力の發展に伴う階級的秩序への再編過程に照応し、地域に固有な様式をもって首都——首都圏——領域の配置を生ずる。種族共同体より氏族共同体、さらに村落共同体への發展の過程、この中には「共同体」の原初的形成にあずかる環境要因と生産様式の対決の課題がある。

社会的結合の本源的形態としての群——母系氏族共同体——父系氏族共同体の發展は、婚姻圏の縮小、生産圏の画定につらなる。この間に、種族の移動に伴い原種族と移動種族との間の利害の対立、さらに共同体内部の規制が強化

第1表 古代国家の内部構造の1例



(1)

同じクリスタラー結合でも、(1)は完全な集束的結合と政治都市および地方政庁所在地の圧倒的優位に立っている。(アジア型) (2)は集中的結合は弱く、他の都市国家との間、あるいは商業植民地との間に連鎖的結合の優位に立っている。(オリエント型)

される。これらの中で、農耕経済が人工灌漑によって支えられ灌漑労働の管理組織を必要とした場合、奴隸制は古典的に形成された。ここでは、原初的な小国家が形成され、河川流域における水利の調整とその統一の体系をすすめた。水利共同体は、それ自身地域社会と環境の複合体を形成し、周辺の異質集団との文化交流が阻止される場合には、すなわち内包的発展が優先される場合には、それ自身の「生態的均衡」を維持し再生産する。自然的な水利体系の分散——造山帯の沖積低地の一般的形態——に基因する地域集団の占拠域の分散立地、季節風気候の不確定な降雨に伴う水利の集約的利用の必要性、これら環境への生産様式の対決の制約、これだけがアジア的農耕社会の属性ではない。しかし、天水灌漑に根を下ろした偏西風の風土下のヨーロッパ的農牧と対比するアジア的農耕との間の、共同体形成の基本的「原初的段階はこの課題を明らかにして始めて解きうるものではないか。しかも、半乾燥気候ないし季節風気候縁辺域に立地したアジア的農耕社会は、その水利体系の統一をより高度に要求し、治水と灌漑の課題を统一的に解決しなければならなかった。ウイットフォーゲルの方式、とくにその官僚制の早期的成熟に基づくアジア的専制の理論(4)はウ

エーバー(5)にも片鱗が伺われるが、その提起された問題にはまだ多くの未解決の点が残されている。

古代的段階においては、政治的都市の萌芽がみられるが、それは既に共同体的基礎の中に立地の基本要因をひそめている。古代都市が必ずしも社会的分業を反映したものであるにしても、古典古代における都市国家においては政治の中心即ち消費の中心という平行関係がみられるのに対し、アジア社会においては皇帝の居城、国家官僚の地方における居城、軍の駐屯地としての都市の立地が優先し、港湾都市・交通都市などはこの附属的機関として、あるいは派生として立地したに過ぎないという質的な相異があったのは、何に基因するのであろうか。ヨーロッパはこの頃から、都市の原理を国家の原理として発展してゆく。そして、市民が社会のいない手として、都市の原理の拡大としての制度を国家が受けとり、国家的な規模に敷衍し、都市の発展と地域的分業は並行した。近代においても、たとえば中国では「人と国家との中間にある地縁的あるいは政治的な共同体即ち Community の下からの社会形成力が弱いために、巨大な国家の原理が祖先の宗朝を祀る」(6)原理の中に、個人と同族主義との二元的構成は、中国の都市を宗族や郷党との紐帯から断ち切れなかった。このようなアジア的都市の機能は、インドではカスト制により強固に維持された政治都市としてあらわれた。

アジア的古代共同体は、土地を基礎とする小共同体の上に立つ包括的統一体が、上位の所有者又は唯一の所有者としてあらわれる形態を確立しつつ、互いに独立した小共同体(この中では個人が割り当てられた土地で家族と一緒に独立に労働する)に共通の課題となった水利体系の統一を解決する過程の中で工業と農業の結合が保たれ、自給自足体制即ち再生産と剰余生産とのすべてを自身のうちに含む体制を維持した(7)。都市の立地が政治的なものに限定されたことは、これらの諸条件と密接に関係し、用水路・交通手段も従って専制政府の事業としてあらわれた。

二、種族共同体の形成と環境要因

共同体は本源的には血縁共同体として出発し、やがて種族共同体に発展した。種族共同体は血縁共同体の発展として、地縁共同体への本格的な転化の要素を包蔵している。この転化の過程はあらゆる要素について均等に行われないうで、種族の氏族、さらに家族への分解も従って、種族共同体原理の優先（インドの形態）、種族共同体の発展に伴う血縁・言語・慣習の統一、家族間の結合における同族原理の優位（中国的）等の諸形態をとった。

アジアの形態では、生産の基本的生産手段としての土地と水とはもっぱら全共同体に所属し、共同体は完全なまたは部分的な自治権をもちながらも、しかも諸設備は集団労働によって維持する必要から共同体の上位への包摂が前段階のままで進められた。生産手段に対する私的所有の発展がかなり強固な基礎をもち、奴隸制の中に債務奴隸を展開しつつも、手工業と商業の発展につれて債務奴隸制の早期廢止に歩んだ古典古代ときわめて対照的であった。種族あるいはその部分体たる血縁集団が土地の共同占取の主体であるアジアの共同体では、「種族」組織が共同体の支柱を構成する基本共同態⁽⁸⁾であり、この内部で村落や家族などの従属的共同態が形成されている。これは、家長制家族共同態として、さらに家長制大家族ないし同族団の連繫体ともいべき様相を示すものとしてあらわれた。ここに特殊アジア的な階級分化の起点がある。「土地の私的所有は、まだ「囲い込み地」という形でわずかに橋頭堡をつくっている⁽⁹⁾」に過ぎず、とくにインドではカストという形に固定化された種族間分業と結合して、共同体内分業が不變の比率と形態にまで化石化した。都市は、アジアにおいては種族共同体の何らかの形における転化形態にすぎず、それ自体独自の共同体ではない。地中海沿岸の古代都市国家は、連鎖的結合⁽¹⁰⁾を生産し需要した。古代農業の中心地たるオリエントの辺境として、いわば移住植民地的機能の上に古典古代が形成されたこと、これは治水灌溉がやが

て命題として打ち出された場合にも、アジアの形態にその類型を示すことにならなかつた根本要因の一つでもあろうか。古典古代はアジア的なものに比べて、はるかに高度な社会的分業を包含し、この中から軍事的職業集団を独立させる。血縁的結合はこの過程の中で決定的に規制としての機能をゆるめ、戦士共同体を地域的に分化する。アジア的形態においては、私的個人の成長が抑圧され、農業共同体それ自体が一般奴隸制の基盤に転化し得た。古典古代の都市は、古代的分業の派生から生まれた集住の地域の形態として立地を展開する。

アジア社会における水利の機能、それにはかなりの疑問と問題が残されているが、アジア各地域の個性的発展の要因の、基本的な部分を構成している。インドでは、隔離されて存在するいくつかの河川体系を中心に治水複合体が形成され、政治体制と軍事体制がそれを包摂してゆく。日本では、河川流域単位の狭小さの反映として、灌漑も単に地方的な規模で行われたに過ぎず、封建体制の本格的な発展の有利な自然的・地域的・生産力条件が徐々に準備されて行った。中国でも、黄河の地理的・生産力背景をなす後背地で、局地的な井水灌漑と河川築堤の萌芽によって、いわゆる中国の古代的封建制を成立させた。

しかし、環境の多様性の中にいわば対立的な種族共同体を形成したアジアは、タイガの狩猟文化圏、乾燥圏の遊牧文化圏、モンスーン気候帯及び周辺域の農耕文化圏をして、それぞれ固有の史的展開を歩ませた。さらに、それぞれの文化圏の接触はたえず自己社会の拡大として、同化をこととした文化変容を支配種族の優位において進めた。中国では、これを夷狄感覚として固定し、古代思想としての儒教の外的要因たらしめた。

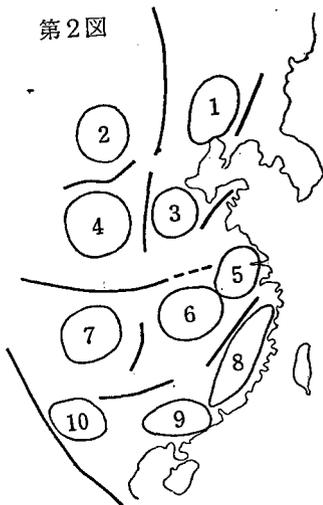
紀元前三〇〇〇年紀より二〇〇〇年紀の間中国の農耕文化は確固たる足場を固めた。洛水・渭水の合流地点に形成された沙苑文化は、中石器時代の細石器文化として、後に長城以北を特色づける遊牧文化を展開したが、黄土台地の

第1図 古代前期の地域構造

アジアには、タイガ地域から朝鮮半島にのびる狩猟文化圏(極北古文化)、モンゴルから中央アジアに広がる牧畜文化圏(ユーラシア草原文化)、モンスーン気候帯及びその周辺に展開する採集文化圏(南方文化)、これらの接接地帯ないし自然的環境の局地的優位による農耕文化圏(原始農耕文化)が対立した。これらは、その文化類型の局地性と対立とによって、相互にその個性を維持した。この中から農耕文化圏の拡大とそのにない手となった民族(正しくは種族群)による政治地域の初期的形成がみられる。

- 1 興安嶺
- 2-3 太行山脈
- 4 秦嶺

第2図



7. 秦嶺・四川地域…山地住民(テ イベット系)のエクメネの東限。「巴」「蜀」の地域。
8. 浙江・福建地域…のちの「越」の地域がこの北限にある。南は「閩」の地域。
9. 珠江流域…「百粵」の地域で南方文化の局地的中心。
10. 雲貴高原地域…「滇」の地域。

第1図

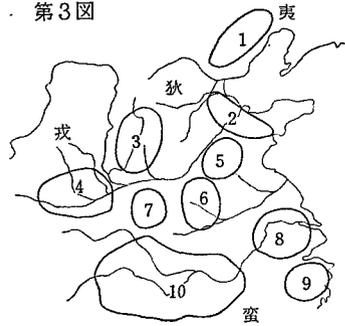


第2図 古代中国の地域的单元

1. 遼河下流域…「夷」の地域で、満州族の居住地。極北古文化のにない手たる狩猟民族のエクメネの南限でもあった。
2. 北部高原北域…「狄」の地域で、太行山脈以西オールドス付近まで。ユーラシア草原文化のにない手たる牧畜民族のエクメネの東限であり、農耕民との接触地帯でもあった。
3. 黄河中・下流域…「漢」民族の居住の核心となった段帝国の文化圏。農耕民は、ここに根を下ろし、古代国家はここから海水と灌漑により中央集権体制の強化の基盤を形成した。
4. 黄土高原地域…2, 3の地域の漸移地域ともいうべきところ。「戎」の地域。
5. 揚子江下流域…のちの「呉」の地域。「蛮」の地域の北限。
6. 揚子江中流域…のちの「楚」の地域。

第3図 華北の古代の政治地理的単元
 いわゆる北狄・南蛮・東夷・西戎を周辺に
 もち、比較的孤立した小邦群が乱立した。
 (第2図と対比)

1. 遼河下流域…「燕」の地域。
2. 山東地域…「齊」の地域。
3. 汾水流域…「晋」の地域——「魏」と「趙」
 が分立してくる。
4. 渭水流域…「秦」の地域
5. 邠水上流域…「宋」の地域——のちに
 「楚」に蚕食される。
6. 伏牛山脈北域…「蔡」の地域) のちの
 7. 洛河流域…「周」の地域) 「韓」の地
 域でもある。
8. 揚子江下流域…「呉」の地域) のちに「楚」に蚕食される。
9. 錢塘江流域…「越」の地域)
10. 揚子江中流域…「楚」の地域



周辺低地では農耕が発展した。ヨーロッパでは最初の開拓地は沼沢地であつたが、黄土地帯の乾地農業は耕地造成のための森林伐採が疎林地であることにより開拓は容易であつた。耨耕が女子労働の手によって展開し、陝西・山西・河南西部の黄河中流域に定住集落が立地するにつれ、灌漑を媒介とした共同集団労働の原理が進展した。黄河流域を中心に広く四川・台湾・香港・朝鮮方面にも及んでいた彩陶文化はもともと牧畜的色彩が濃厚であつたが、農耕が発達するにつれ農耕文化本来の黒陶文化におきかわつてゆく。黒陶文化は、黄河流域から淮河及びヤンツー川下流域、台湾、遼東半島に分布した。細石器文化圏に展開した牧畜文化は、生活圏の拡大過程において、農耕民と拮抗した。これは、長城以北の砂漠ないし草原生態系に立地し、後に南滿州・蒙古に延び新石器時代中期には熱河の林西に達した。また、秦嶺・淮河線以南は、紀元前二、〇〇〇年代から一、〇〇〇年代の前半にかけては、農耕の揺籃は定住民の地域的統一をほとんどみなかった。一方、黄土台地を流れる黄河の氾濫は、たえず治水事業を必要とし、北シナ平原への膨脹Ⅱ開発をまっけて農耕文化が確立された。主要食糧は黍・稷で、おそらく女子労働による粗放な耨耕と男子による狩猟及び開墾をもつた母系的な社会であつた。

集約的農耕のために必要条件となった灌漑と家畜飼養が父系制への移行条件となつてゆくが、初期には灌漑の機能は部分的なものに過ぎず、少数の支配的諸氏族が采邑として領有地即ち築城された諸土着地に、かれらの軍事的家臣と共に住んでいた。この分権的な小国家も、古代的農耕生産諸力の発展の中で、とくに大三角洲に開拓が進むにつれ公共的な治水事業を進展し、ここに種族共同体の解体が芽生える。

ウィットフォージェルは、「地球上の水不足地帯の潜在水力は、特定の歴史的事情のもとではじめて現実化される。原始人は大昔から水不足地帯を知っていた。……植物の再生産を利用することを覚えたのちにはじめて……小規模な灌漑農耕および、ないし大規模な政府指導下の農耕を通じて、古い自然的背景の新しく発見された性質を操作しはじめた。……これは可能性であつて必然性ではない。……人間が水不足の地勢に特殊的に反作用して特定の水力的生活秩序にすすむのは、降雨農業の強い中心地の影響外では採取的な生存維持の経済水準以上にはあるが、しかし財産を基礎とする工業文化の水準には達しないだけである。」⁽¹⁰⁾とし、中国西南部、インド、中央アメリカで降雨農業を行なっている多数の共同体や、水利農業地帯の辺縁の多くの狩猟・漁撈・採取部族が灌漑農耕に転換できなかったこと、これは後者に比して前者が社会より強力な国家の形成した要因として指摘した。ウィットフォージェルの論理は一貫して「水利」環境中心主義に立脚していること、東洋の官僚制をそれ自身固有な「専制」に他ならないとすることであり、その間にある共同体結合様式に触れることが少い。エジプトにおいては、国家官僚が著しく発達し、氏族組織の痕跡は存在しなくなった。しかし、中国では国家権力が氏族権力を破るに足るだけの力をもたなかった。インド⁽¹¹⁾においては、父権的な大家族を構成する原始アーリア人が二、三代代にわたつて共同生活を営みこれらが合して氏族を、さらに氏族の集合が部族を構成していた。アーリア人による農村社会成立後、順次部族の戸長が王とな

り、庶民の集會に過ぎなかつた人民集會も、宗教による共同の自覺——實際にはアリア人による被征服民ドラヴィダ、モンゴール種族の隸屬の制度化——による民族的結合が進むにつれ、共同体の宗教的儀式的執行者たるブラーフマナ、軍事的貴族をふくむ貴族としてのクシャトリアに隸屬する自由民が分化し、ヴァルナ（階級）のためのダルマ（生活様式の規律）が形成され、村ぐるみの労働、村有団地を媒介とする種族共同体の強固な階級社会への直接的轉化をみるに至つた。これらは、單なる環境要因からの説明で済まされない多くの問題をもっている。

三、段・周代の政治地域と種族共同体

種族共同体の再編の基本単位は、消費単位としての世帯と生産単位としての共同体の相互規定であり、自給經濟の解体と再生産圏ないし自足圏の拡大によって推進される。各家族の氏族からの独立と地縁的な村落の形成が「十分に展開した場合には、……家父長制的な単婚家族から成っている村落共同体が成立」⁽²³⁾するが、アジア的社会では最高の統一体の政治的な支配を媒介として形成されてゆく集團的所有の中で家父長制家族が特定の土地区画の世襲的な占有者にすぎなかつた。成立の主体がたとえ家父長制において共通であつても、「被治者の側に家父長制が未成熟であり、従つて所有権が未確立のために、所有は家父長としての専制君主にのみ實現」⁽²⁴⁾した。黄河流域の自然草野に根を下ろした殷の文化は、黄河の水害からの逃避と沃地を求めての人口移動を伴つていたが、灌漑と築堤が氏族の連合としての部族、部族の連合としての種族、さらに種族同盟を形成する促進的環境要因となる。部族共同体は破壊されないままに全体として段に隸屬し、被征服部族奴隸の國有に基づく神政國家の基本部分を構成した。

「史記」によると、堯と舜は自分の息子達の中から後継者を選ばなかつたし、この頃には母系氏族の遺制がみられたが、當時は財はすべて氏族の共有であつた。母系氏族の集合が「姓」とみられ、「族」を単位としていたが、家畜飼育

の展開に伴う父系制への移行により「族」の分岐たる「氏」が成立した。殷の段階においては、共同体が「世代を経るにつれて新たな氏を分岐し、それに伴って母胎の氏が族に變じ、姓に化し」⁽¹³⁾たものとみられる。禹（治水を意味する）による黄河治水の伝説の意味する三角州の耕地化による農業生産力の開発は、草野栽培を庭園栽培に転化した（これは水路の開鑿、排水を必要とした。田は「縦横に通ずる水路また茂る稲を口（冊）む」⁽¹⁴⁾意といわれ、これが周の井田につらなる。北シナの主要穀物は黍・大麦・小麦・高粱で、耦耕（田の集団的耕作）が役畜の使用と人工灌漑によって進められた。この過程で、種族の首長の王への転化、共同体の土地の国王の手への集中があらわれる。後に都市、領土を意味するような「邑」すなわち村落あるいは数個の共同体には、共同体全体の共同耕作地「公田」と各家族が私的に利用した「私田」があり、初期には氏族Ⅱ種族的な軍事的民主制をもつ長老会議が支配していたが、やがて王が土地の名目上の最高所有者から世襲的な支配者に成長する。王は「天下」の国土を支配する「天子」として、種族共同体を統一するが、共同体は「姓」という血縁集団で、「同祖同生であるという自覚をもった人々……が、聚会して住ったものが……国であり邑であった」⁽¹⁵⁾。「氏は姓の細分……古の国は、国が氏であるまゝに姓であった」⁽¹⁶⁾。交通圏の拡大は、「最初からあった、あるいは比較的接壤して狭い範囲の国と国と」が「多く同姓連合を形成」することとなるが、「絶交世界のものとして久しい対立をはずけると、ここに世を異にし、生を異にする『異姓』が存在して」⁽¹⁷⁾くる。「姓の封鎖性や絶対性がつよくなり、それがより強度の自覚をいだいた血族聚団化してくると、人々はもはや兄弟の血盟をすることによって簡単に兄弟の国の人と人とはなれなかった」⁽¹⁸⁾。姓には、「その姓の人ののみ司掌しうる特別な事物や職業があるという觀念」⁽¹⁹⁾が生じ、ここには「同性不婚の礼則」⁽¹⁸⁾があった。近隣の種族との闘争においても、被征服種族の社会秩序をかえず、従来の長老たちを残しかれらに尊号を

与えた。しかし、姓の制度も、「遠隔の諸夏の人をも親類の觀念をもつて相結ぶ所以のものとなつてその歴史的な役割を終り、……秦を最後として天子にすら姓はもはや無用の存在となり……親類の觀念と同一文化圏の觀念によって相結ばれた全面的な同質社会が形成」⁽¹⁵⁾されるに至つた。

周は定住牧畜民の分岐として、井田制を完成させ、定住農耕民に成長したが、農業生産力の發展は父系氏族を成長發展させ、食糧資源の供給拡大は父系氏族の不断の分岐をもすすめた。血縁關係は弛緩し、地縁關係が重要性が増してくるが、これと同時に「庭園栽培」による周人の父系氏族の構成する部族から土地所有の階層分化がすすみ、かつての殷の集落「丘」は集積して「邑」となる。周城は周王の親族や側近者たちの貴族間に分配され、周王に定期的な貢納をする独立小王国の統治者を族生してゆく。やがて五家族が近隣共同体即ち「隣」を、五隣が村即ち「里」を、四里が氏族即ち「族」を、五族が群即ち「党」を、五党が地区即ち「州」を、五州が「郷」を形成し、世襲的な専制君主があらわれるようになる。この中から豪族の大土地所有と、武人・官僚・商人の土地兼併がすすみ、秦漢時代に移行する。姓による統一の弛緩がよびおこしたものが、同姓不婚により象徴される宗法であり、血縁的ヒエラルヒーとして種族共同体の同族社会への転化が生まれた。異種族との接触、この中では血縁的ヒエラルヒーはより一層強化され、「風土を異にする」湿润地域と乾燥地域の接触・対立・融合の間に發展した古代中国では、定住の欠如(かれらは絶えず他の集団と交渉を求める)する遊牧社会(西方)と、定住農耕社会(同質の生産の場、治水を必要とした外災による共同の利害、従つて血縁關係の濃い村落共同体の形成をみる東方)の相剋の歴史がすすみつつも、「東方の進んだ農耕文化、封鎖的な農耕社会の上に、西方の統一的な政治技術、普遍的な政治原理がのっかるだけ」⁽²⁰⁾で「これらは共存しつつも何等の相剋を起さない……一見一個の見事な統一社会が形成」⁽²⁰⁾されたかにみえる周代のいわゆ

る「古代封建制」がうまれた。宗法はさらに尊祖・敬宗・取族の三位一体として、家長的家族を普遍化し、王城を核心とし国を外郭として描く地域たる邦（邦は穀物、^{オヤマト}邦は部族成員の集落ないし大宗の当主たる郷大夫の知行所）にすすんだ。そして、血縁関係は擬制化されて地縁関係に転化し、共同の血によって結ばれる一族の生活の本拠をなす共同の場即ち田園の設立が「封建」としてあらわれた。これが春秋であり、水田耕作と牛耕の発達、農奴労働の重要性の増大、「社会の基本的な変革をもたらす力である生産力の発展を促すものとして、……鉄器時代に入り」つつも「たとえ黄土平原上において農耕がなされたとしても、それはごく規模の小さいもので、そのみで生計を立てることが困難」⁽²¹⁾であつたし、家長的土地所有の発展する一方には強固な前期の遺制がみられた。

四、春秋・戦国より秦に至る間の政治地域における種族共同体の遺制と再編

戦国時代には土地所有の強化と拡大、離農ないし小作人化がみられる。「旱地農法の成立は、おそらくそれ以前より強い共同体社会をさらに分解して、共同体に家長的土地所有を成立させ」⁽²²⁾たが、旱地農業が共同体で処理できなくなると共に、「一面において家長的土地所有を成立せしめる反面、また一面においては共同体内の劣敗者、あるいは生産力の発展にあずかりえなかつた他の共同体の成員は、この家長的土地所有者の中に吸収されてゆく。……その結果、家長的土地所有者の構成の中に、それと血縁関係のない非血縁者が隷屬的な地位を得てくる」⁽²³⁾。それはさらに「家長的家内奴隸所有者の同族的結合体として、いわゆる豪族的なものを形成する。……たとえそのあいだに血縁的な系譜の断絶があるとしても、型態的には唐代まで続く」⁽²⁴⁾。

秦漢帝国は、家長的土地所有者としての小農民を支配する構造として形成され、その限りにおいてこれら小農民の私的な土地所有（名田、所有）をみとめた。そして、「秦漢帝国はその支配の機構として、支配者としての帝国みず

からが豪族に見られるような家父長的家内奴隸所有者の性格をとって行⁽²³⁾き、「宗法秩序を排除して、非血縁者の家父長的君主への隸属という形、すなわち権力の唯一の存在の場所が君主であって官僚はその権力の発現の手段である」という形において、家父長的家内奴隸制を性格とする豪族の構造と一致⁽²⁴⁾した。これが郡県制にあらわれた官僚制であり、周の宗法は取捨されぬままに家父長制を維持し、郷村においてそれを再編した。即ち親親は尊祖に、尊尊は敬宗に、長長は収族に通ずるもので、農業の経験者としての年長者を敬うことが、新興地主の家父長制形成の因子ともなる。郷村成員は擬制的血縁関係において、そのまま家族成員となつて同一の姓を名乗り、他の郷村から転入してくる異姓者も旧姓を棄てて、その郷村における共通の姓を名乗った。郷村の社の数も、姓の数に対応し、国家はこのような郷村を地域の単位として形成され、氏族貴族も血縁の優越から脱落し、軍事貴族に更生する。秦の天下統一⁽²⁵⁾は、軍事貴族の武力抗争を背景とし、国家はかれらの生活の本拠と化した。かくして、「姓」集団は、単婚家族をふくむ血族集団の「地縁」化という形で、擬制的に再編されるが、アジア的停滞の一面、その中国的なあらわれはここに深く根を下ろしている。孔子の思想は、つとにこのような小家族を倫理の基盤にしたが、「天下」の思想はこの理念を家父長制合理化のために転化した。後に、華中・華南に政治地域の拡大がすすめられても、この原理は長く支配した。農耕の、とくに水田耕作の集約化が要求した手労働体系が、あるいはこの原理の支配を助長したものであろうか。ここにはなお、地理的側面——地理学独自の環境論に限らず——における古代中国のより詳細な分析に際し、余りにも多くの未解決の問題点が累積している。

五、中国の歴史地理の個性的法則としての環境と地域の試論

中国における「社会」は、一部族の人々が共に祀る社に起源をもち、部族的共同社会（共同の社神を中心として成

立した血縁的なもの)が地縁的共同社会に発展した⁽²⁴⁾。「社」ないし「会」とよばれるギルドが漢代になって農村各地に発生したが、「氏族的なもの漢代における崩壊にも拘らず、強固な血縁観念及び祖先祭祀を中心とする諸々の制度は永く後代まで遺存」⁽²⁵⁾した。しかし、それは「氏族団体そのものの完全な崩壊ではなく、実は氏族経済のみの崩壊」⁽²⁶⁾であった。各ギルドの独立性と孤立性に由来する割拠主義の中で、対内的な機会均等と対外的な独占が展開してゆくが、これは農村共同体の分散的存在と各共同体の孤立と結合する。「完全な同質性をもち、社会的容積の小さい原始共産体においては、共同社会性が極大に達すると共に、人々は自己の全人格を挙げて一箇の集団中に没入している。……分化せる社会においては、個人が社会的諸圏の交叉点に立つことによって己れの個性を回復する。この個性の自覚はとりもなおさず、平等思想の前提」⁽²⁶⁾であった。いわば、絶対支配のおられる外部で「東洋的専制」が進行しつつも、氏族的ないし同族的な「平等思想」が残存した。アジア社会は、季節風だけが、あるいは灌漑だけが宿命づけた停滞社会ではない。「中国の秦・漢の時代に存する小作制……は家内奴隸制で……家内奴隸制の段階においては、まだ基本的な関係は共同体にあ」⁽²⁷⁾ったが、ヨーロッパで労働奴隸制に先行した家内奴隸制についても、アジアでは労働奴隸制が十分に発達せず、内部に労働奴隸制の可能性をはらみながら、家内奴隸制があるていど続いてゆく。中島健一はヨーロッパの奴隸制について、「じつは耕種部門では典型的に発展しなかったたのではないか、耕種部門よりもむしろほかの方面で、すなわち鉱山労働とか、道路工事または雑役とか、あるいは……手工業経営とか、さらには……果樹園芸農法や養畜経営に、じつは労働奴隸制が典型的に発達した……耕種部門においては……広汎な賦役労働を伴うところの貢納制というものが、労働奴隸制の未成熟のまま、非常に早くから発達している」⁽²⁸⁾と論じたが、これについては「奴隸制がおかれている歴史的環境、例えばその社会に商業資本がどれだけ発展していたかど

うかという点を必ず考えてみなければならぬ」²⁸との批判もある。

環境は、集団に対し可能的条件を与えるというフランス学派の立場は、さらに進んで主体的環境の認識によって弁証法的に高められた。ウィットフォールの理論には、傾聴に値するものを多く含んでいるが、水の理論が余りにも露骨な東洋への侮蔑に転化しかねないでいる。人間中心の視野、とくに社会構成体そのものの環境への対決の把握が、「地域」集団の分析の視野でなければならない以上、原始共同体において作用したと思われる環境諸要因を超、歴史的に過大評価することは、極力避けなければならない。また、同時に環境への対決により形成された種族共同体段階の初期的様式を、それ自身地域に固有な類型として把握することには、きわめて大きな危険が内蔵している。この問題をそれ自身の課題として、さらに発展過程そのものによって追究する立場は、歴史地理学そのものでなければならない。

アジア大陸の各地域において、それぞれの環境条件との対決において形成された原初的な文化類型、その中に包蔵されつつ自己発展をとげた生産諸様式、とくに種族共同体の再編様式、さらにそれが国家の前期的官僚制として政治地域の構造規定をとげる諸様式、これが古代の政治地理学、あるいは古代政治地域の歴史地理学の解明すべき課題である。中国において、黄河水系のもった治水の機能が、労働力の集積をよびおこしたことは、換言すれば、灌漑農業の立地がこの地域の政治地理に重要な積桿となったことは否めないとしても、これは季節風気候帯の縁辺域における半乾燥気候下の三角州の開拓と共に本格化した、種族共同体の本来的機能たる血縁的原理の地縁的原理への転化の過程そのものと平行しており、これは周辺地区における異種族との対立抗争の激しい古代史の過程でもあった。

むすび

以上、アジアとくに中国の古代について、政治地域の形成原理を歴史地理的視野において概観した。多くの疑問と将来への課題を残しているが、更に改めて変革期のアジア社会の分析をすすめ、いわゆるアジア的停滞の地理学的指向を明らかにしたい。

本稿をまとめるに当り、多くの示唆を与えて下さった方々、とくに静岡大学佐々木清治、東京学芸大学の岩田孝三、ならびに相村大彬の諸氏に対し、深く謝意を表する。

- (注) (1) 拙稿「政治地域の歴史地理学的研究の諸問題点」 歴史地理学紀要 I (一九五八)
- (2) 村松繁樹・川喜田二郎「人文地理学入門」 四五七—四八三頁(とくに四六三頁以降) 一九五四 京都
- (3) 江上波夫「文化交流と文化遺産」(現代史講座V) 三三一—四〇頁 一九五三 東京
- (4) K・A・ウイットフォーゲル(森谷克己・平野義太郎訳)「東洋的社会の理論」 一九三九 東京
- (5) Weber, M.: *Wirtschaftsgeschichte (Abriss der universalen Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, aus den nachgelassenen Vorlesungen von Prof. S. Hellmann und Dr. M. Palyt) München und Leipzig 1924*
邦訳(黒正巖、青山秀夫訳)「一般社会経済史要論」一九五九版 東京
- (6) 増田四郎「都市」二八—二九頁 一九五七 東京
- (7) K・マルクス(岡崎次郎訳)「資本制生産に先行する諸形態」とくに八一—三頁 一九五九 東京
- (8) 共同態の用語は大塚久雄「共同体の基礎理論」一九六一 東京による。
- (9) 同書 五四頁
- (10) Wittfogel, K. A.: *Oriental Despotism. 1959 New York*・邦訳(アジア経済研究所訳)「東洋的専制主義」一七一—一八頁 一九六一 東京
- (11) 中村元「最古代インドにおける共同体の形成」(共同体の研究上) 二五六—二八六頁 一九五八 東京

- (12) 「歴史学の成果と課題」(古代国家) 二二頁 一九五〇年歴史学年報
- (13) 井村薫雄「中国古代社会経済の研究」三七頁 一九五〇 東京
- (14) 同書 五三頁
- (15) 山田統「天下といふ概念と国家の形成」一二七頁 共同研究(古代国家) 一九四九 東京
- (16) 同書 一五八頁
- (17) 同書 一六一頁
- (18) 同書 一六五頁
- (19) 同書 一七九頁
- (20) 三上次男「古代中国における東方と西方」八一頁 共同研究(古代国家) 一九四九 東京
- (21) 西嶋定生「古代国家の権力構造」(歴史学研究会一九五〇年報告「国家権力の諸段階」一一二四頁) 八一九頁
- (22) 同書 一一頁
- (23) 同書 一八頁
- (24) 銅直勇「『社会』続考」日本大学文学部研究年報 第七輯(一九五六) 九一二七頁
- (25) 清水盛光「支那社会の研究」一一一二頁 一九三九 東京
- (26) 同書 一三四—一三五頁
- (27) 前掲書(二二) 三六一三七頁
- (28) 同書 三四—三五頁
- (29) 同書 三六頁
- その他の参考文献
- 1 Wundt: *Volkerpsychologie*. Bd III. *Die Politische Gesellschaft*. 1917 Berlin.
- 邦訳(平野義太郎)「民族心理よりみたる政治的社会」一九四一 東京
- 2 松崎寿和「新黄土地帯」一九六〇 東京
- 3 諸橋徹次「支那の家族制」一九四〇 東京

- 4 梶村大彬「チナおよびチュンクオという地名の表現にみられる論理と現実」(2) 学芸地理15・16号(一九六一)
- 5 飯塚浩二「東亜における生活様式の諸類型」東洋文化1(一九五〇)